

怒りをこめてふりかえれ

生きること、愛すること、闘うこと——

坂本恵一

「近ごろの若者は……などと申しまじく候」という言葉は、太平洋戦争中、南太平洋の戦線で戦死した日本海軍連合艦隊の山本五十六司令長官が、戦場から知人に送った手紙に書かれてあったものです。これは祖国のために死を賭して戦場に向かう若者たちの姿を見送った時の感慨を伝えたものだったのだと思います。

私はこの「近ごろの若者はなどと申しまじく」という言葉をかみしめながら、現代の若者への伝言を語ることにしようと思います。私の抱く若者像は三つあります。

第一は太平洋戦争中に特攻隊となって戦死した、当時の十歳代から二十歳代の青年たち。

第二は戦後、反戦平和のため学生運動に参加した全学連始めとする若者たちであります。

そして第三は現在の皆さん、ケイタイを持って情報時代の波の中にいる若者たちであります。

第一と第二の若者はなぜか重なり合います。——それはわが身一身のことではなく、祖国のため社会のために、捨て身で立ち向かう姿が心をつつからでしょう。私が旧制上野中学に通っていた十六歳のころ、講堂入口に飾られた上野中学出身の戦死者の写真が、次々に増えていつてついに飾りきれなくなつたのを覚えています。

戦後何気なく聞いた「くちなしの花」という流行歌が、特攻隊の遺稿集の中にあった詩から作曲されたものと知り、その歌を聞く度に襟をただす想いにかられました。

かつて反戦平和の闘いに勇敢に行動した若者たちがいます。東京立川の近くの砂川軍事基地反対闘争で、学生たちと警察機動隊が対峙していた時、スクラムを組んだ学生達の列から、夕焼け小焼けの「赤とんぼ」の合唱がおこりました。その姿に私は映画「いちご白書」のラストシーン以上の感動を覚えたものです。

私が十八歳で大日本印刷に入社し組合運動に参加した時、その周辺の物理

大、女子医大、早稲田大学の学生諸君の、労働組合運動への支援活動はめざましく、労働問題は将来の自分たちのこととして労働者との連帯に力を貸してくれたのです。

そうした中でも記憶に残っているのは、新宿の商店街の傘屋さんが税務署に差押ええられた事件であります。その強制執行反対を支援した早大の学生が警察に逮捕されました。周辺の労組、学生組織から抗議運動がおこり、私たちも労組青年部として支援に駆けつけました。夕暮れの戸塚警察を取り巻く支援団体と学生たち、それに一般の民衆も加わって、群衆は道路が見えないくらいふくれ上がり、スクラムを組んだ労働者と学生のシュプレヒコールが夕闇に響き渡りました。その中で沸き起こった「都の西北早稲田の杜に：」の校歌、女子学生もスクラムを組んで歌っている、私はあの時ほど感動的に早稲田の校歌を聞いたことはありません。七拾余年の生涯で最も心に残っている経験でした。

こうして私はその後の生涯で必要なものを、この十代から二十代にかけて学びました。立場を超えての連帯、人間関係、人を愛すること、学ぶこと、そして不当なものに対して闘うこと。これこそ私の人生の原点になりました。そうした精神は今の若者にもあることを信じています。あの阪神大震災の時、いちばやく駆けつけて救出や支援に奮闘した青年たちや、日本海でロシアのタンカーが沈没して、海岸が油にまみれた時も、多くの若者が地元の人と力を合わせて、その除去作業に当たりました。そうした心のやさしさと実行力を多くの人が潜在的に持っていることは間違いありません。

しかし私は今多くの学校で起きている「いじめ」や、マスコミをにぎわす事件を起こす青少年に言いたい。

それは「怒りをこめてふりかえれ！」ということですよ。それは不正や不当な者に対してもっと強くなれということですよ。

なぐられたらなぐり返せ。自殺するぐらいならどんな相手にでも反撃できる。廻りの学生も関わりを恐れて傍観するな。沈黙は共犯である。これは機動隊と殴り合えと言っているではありません。みんなでその場で出来ることをやろう。「いじめ」は傍観者の数に比例する。廻りの多勢が協力すればどんな相手にも負けない力が出ます。

政治に対しても無気力無関心なのを「無党派」などと気どることはやめなさい。だから総理大臣に「無党派は寝てくれた方がいい」などとなめられるんです。既成政党がいやなら自分たちで政党を作ればいい。

ケイタイ電話もいいでしよう。インターネットも一丁革命も大事でしょう。けれども何かを忘れてやいませんか。必要なのは情報の量ではなく、志です。よ。熱い想いですよ。

幕末の志士坂本龍馬は、ケイタイもインターネットも持っていなかった。ラジオもない。テレビもない。新聞もない。今から見れば閉ざされた世界の情報原始時代、徒手空拳で国家の未来を予見し、同志を集め、闘い、船中八策で民主主義の基本を定め、そして志なかなばにして京都で凶刃に倒れました。怒りをこめてふりかえれ！不正を怒り弱いものを援けない若者は若者ではありません。私には遠く無念の想いで倒れた人々の伝言と始源の恨みがあります。私は安らかに死にたくはない。歯きしりをしながら死にたいと思っ

ています。
最後に私が二十一歳の時、朝鮮戦争に反対し警察に逮捕され、小菅刑務所の中で書いた一篇の詩を朗読して結びの言葉とします。

「火」

おい兄弟 寒かったら

ふるえてないで焚火をしよう

なに 燃やすものがない

そこにあるじゃないか

勾留理由開示の召喚状や

破れたシャツや はな紙

火がない？

その手錠で内出血した手をあててみる

火がつく

右の文章は『E+D+P』の時代から、本誌に印刷技術関連の記事を、寄せて下さっていたプリンティング・ディレクターの坂本恵一さんが、京都の立命館大学で開かれた「高齢者の主張——世代の掛け橋——若者に伝えたいこと」という講演コンクールで、最優秀賞を受賞された時の講演テープから要旨を起こしたものです。

坂本恵一（さかもと けいいち） 一九二九年生まれ。東京市立第二中学卒業。大日本印

刷、日本写真印刷でレタッチマン。奥村印刷、錦明印刷で製版部長歴任。現在プリンティングディレクター。東洋印刷技術顧問。「著書・受賞 昭和54年度日本印刷技術協会賞受賞。

「レタッチ技術手帖（上下）」「眼で見るカラー製版共著」「入稿から出稿までのカラー製版品質管理」現在印刷専門誌に「印刷人日記」「デジタル解体新書」など連載中。